中國出土資料學會會報

２０１４年３月８日　第５５号

〒 113-0033　東京都文京区本郷７－３－１
東京大学文学部　大西研究室　中国出土資料学会（事務局）
Tel：03-5841-3822　Fax：03-5841-3822　e-mail：office@shutsudo.jp
http://www.shutsudo.jp/

《2013 年度第 2 回例会（総 58 回）：2013 年 12 月 7 日（土）於：成城大学》

（Ⅰ）漢代画像石に見るふくろうの表象　―その機能と地域的特徴―

矢島　明希子（慶應義塾大学大学院文学研究科）

文献資料上、ふくろう（鴟鴞）は死や不孝の象徴であり、悪鳥というイメージが強くあるが、殷代青銅器を中心とした画像資料から見るふくろう像の研究を通して、古代鴟鴞神の存在が注目されている。殷代青銅器に見えるふくろうは、祭祀に関与し、神意を伝える仲介者的存在であったと考えられる。この段階では、生者と神（祖霊）とを仲介する関係にある。

そこで、漢代の画像石に描かれるふくろう像に着目すると、①楼閣上に配されるふくろうと②鳳凰に推し戴かれるふくろうの二つのパターンが存在する。①はいわゆる楼閣礼拝図の中に描かれており、②は使者を冥界へと導く昇仙図の一種と考えられるため、ここに描かれたふくろうが悪鳥と見なされたとは考えがたい。また、画像石に描かれたふくろうの特徴は、必ず丸い双眸が描かれている点にある。古代の医療でもふくろうの羽がめまいや悪夢除けに用いられており、夜行性の猛禽であるふくろうの目の力が期待されていたと考えられる。

ふくろうを描いた画像石の出土地は山東・江蘇・安徽の三省が接する境界付近に集中しており、これらの地域は殷文化を引き継いだ地域であり、殷文化との関係が想起される。また、文献資料でもふくろうに関する記述は東方地域に偏向していることが看取できる。習俗の面から見ても、『漢書』郊祀志に見える泰一の祭祀に関する進言や『淮南子』説林訓の記述及び諸注から、季節祭にふくろうを犠牲に用い、羹にしてふるまう習俗があったことがうかがえる。祭肉の分賜儀礼における犠牲は神人交流の媒介であり、殷代青銅器に象られたふくろうと同様の機能を果たしている。

以上のことから、当地域のふくろう文化が漢代にも受け継がれたと考えられるが、漢代では主に死者との関係の中でその力が機能している。ふくろうと死との結びつきは、ふくろうの生息地である森林の減少する中で、墓地林に棲むふくろうが死霊の魂と結びつけられた可能性が考えられる。

（Ⅱ）上博楚簡『成王為城濮之行』の内容と構成

草野　友子（日本学術振興会特別研究員 PD）

本報告では、『上海博物館蔵戦国楚竹書（九）』（馬承源主編、上海古籍出版社、2012 年 12 月）所収の一篇、『成王為城濮之行』を取り上げ、全体の内容と構成を明らかにした。本篇は、楚の成王が城濮の地を視察した際、子文と子玉に軍事演習を行わせ、それをめぐって子文と蒿賈が対話するという内容であり、『左伝』僖公二十七年伝と対比して読むことで全体を把握することができる文献である。

まず、本篇全体の内容を確認した。整理者は本篇を甲本と乙本に分けているが、先

行研究においてすでに甲本・乙本をあわせた竹簡の再排列案が提示されている。そこで、竹簡の再排列案を検討した上で、本篇の釈読を提示した。

次に、本篇と『左伝』僖公二十七年伝とを比較した。本篇の蒿賈の発言部分は、竹簡に欠損があり、解釈しづらい箇所となっている。そこで、現存部分を手がかりに、蒿賈の発言の内容を検討した。その結果、本篇と『左伝』はともに、子文・子玉の軍事演習→子文が祝われる→蒿賈が子文に苦言を呈す、という構成であることが明らかとなった。本篇の特徴としては、一貫して軍事演習が話の中心になっていることが挙げられる。本篇では、子文の子玉に対する軍事演習の指導こそが失敗であり、それが城濮の戦いの大敗を引き起こす原因になったと考えられている。従って、本篇は、城濮の戦いの後、楚の敗北の原因と背景を明らかにするために書かれたものであると推測される。

最後に、上博楚簡に見える楚国故事の性質について検討を加えた。楚国故事は、楚の太子や王族貴族の子弟を対象とした教戒の書である可能性が以前より指摘されている。公開済みの楚国故事を俯瞰すると、その内容は実に多様であり、王や臣下の規範を明確に示すものがある一方、必ずしもそうではないと考えられる文献も含まれている。楚国故事全体をどのように捉えるべきかについては、上博楚簡が全て公開されてから再度検討を試みたい。

（Ⅲ）浅談清華簡的発現・価値及其影響

張　光裕（恒生管理学院中文系）

（以下の文章は、張光裕氏の承諾のもと、本発表の通訳を務めた海老根量介会員〈東京大学大学院人文社会系研究科博士課程〉がまとめた、当日の報告内容を基に作成した。）

まず、『清華大学学報』2009 年第 5 期に発表された「又見荊楚遺珍」という詩の中の①「喜見新書謙與誠」②「攻守二道言曲直」という二句について解説する。この詩は、報告者が清華簡を目にして、その内容について詠んだものである。

①に関して、清華簡には「謙」・「誠」という字が見られる。先秦古文字中には、言偏に従う「謙」字はこれまで確認されておらず、上博楚簡『周易』謙卦の「謙」は「兼」と「土」に従う字に作られている。また「誠」は先秦古文字中では「成」などで表すのが普通で、言偏に従う「誠」は睡虎地秦簡に見られるのが最も早い例である。清華簡の書写年代は戦国中晩期、また炭素 14 年代測定では「前 305 ± 30 年」とされているが、以上のことなどを踏まえると、清華簡のうち「謙」・「誠」字の記された部分は戦国晩期偏晩の書写と推測される。

また②に関して、清華簡の中には「天下之道」として「攻」・「守」の二つを挙げる記述がある。このように「攻」・「守」の二要素を強調する文献が二千年以上前の中国で既に存在していたことは重要である。

続いて、清華簡の収蔵時のいきさつを、その時撮影した写真を交えながら紹介する。真簡だと判断した決め手としては、竹簡の状態および編綴の痕跡がはっきり確認できること、編縄が残っているものがあったことなどが挙げられる。

《新刊紹介》

（Ⅰ）虞萬里著『榆枋齋学林』

（華東師範大学出版社、2012 年 11 月、上下 2 冊、全 1107 頁、328 元）

本書は、著者の『榆枋齋学術論集』（江蘇古籍出版社、2001 年 8 月）に続く論文集と位置づけられる。この間に著者は『上博館蔵楚竹書《緇衣》綜合研究』（武漢大学出版社、2009 年 12 月）を上梓しているが（本会報第 45 号にて紹介）、該書は専論であり、本書はそれを除いた 2001 年以降の学術成果を集成したものである。その内容は前著『学術論集』同様に非常に該博であり、新出土資料研究をはじめ経学、小学、史学、また

学術史研究など多岐に及んでいる。従って出土資料に直接関わる論考は本書の一部を占めるに留まるが、題材は清華簡、郭店楚簡、上博楚簡など多方面にわたり、また前近代に遡る経学の重厚な蓄積を自在に応用している点が特徴と言えよう。本書に示されている視野の広さと、それを基礎にしてこそ生み出されうる研究の有りようには、まことに学ぶべきものが多いと考える。

（Ⅱ）栄新江著・高田時雄監訳・西村陽子訳『敦煌の民族と東西交流』
（東方書店、2012 年 12 月、246 頁、2400 円）

著者の栄新江氏は北京大学中国古代史研究中心主任教授である。本書は敦煌一帯の遺物を題材に、その壁画や文献などの史料に描かれた諸民族の営みと、彼らが担った東西交流の歴史について紹介するものである。取り扱う時代は前漢から唐の滅亡以降にまで及び、特に漢代について記すにあたっては懸泉置漢簡に焦点を当てている。なお本書はシリーズ「敦煌歴史文化絵巻」の一冊であり、甘粛教育出版社との共同刊行という形態を取っている。周知の通り、過去には「敦煌在中国、敦煌学在日本」とも言われたというが、現地中国において近年の敦煌研究を大きく進展させた第一人者によって、本書のような平易な入門書が上梓されて日本語に訳されたことで、多くの初学者が最新の図版を目にし、また研究成果に接することが可能となったのは、大変意義深いと言えるだろう。

（Ⅲ）楊剣虹著『秦漢簡牘研究存稿』
（厦門大学出版社、2013 年 4 月、425 頁、38 元）

著者の楊剣虹氏は元武漢大学歴史系教授である。本書は、著者がこれまでに執筆した簡牘関係の論考 20 本（未発表稿 2 本を含む）を集成したものであり、前半 10 本は居延漢簡、後半 10 本は湖北・江蘇方面出土の簡牘に関する論考からなる。未発表稿の「従漢簡看両漢時期的郵政制度」「漢簡中簿籍的性質」はそれぞれ全 51 頁・全 57 頁にわたる長編であり、両者だけで本書の約四分の一を占めることになる。20 本のうち大部分（未確認だがおそらくは上記未発表二稿も）は著者の武漢大学在職中（1979 年赴任、96 年退休）に執筆されたものであり、従って最新の論考とは言いがたいが、その有用性は現在なお喪われたとは言えず、また 80 年代からの出土資料研究の進展の歴史を物語るものとしても貴重である。

（執筆：高津純也）

（Ⅳ）蘇輝著『秦三晋紀年兵器研究』
（上海古籍出版社、2013 年 10 月、297 頁、58 元）

本書は主に戦国中後期の三晋・秦の青銅兵器銘文を研究した著作である。著者の蘇輝氏は中国社会科学院歴史研究所の編輯であり、『中国史研究』や『中国史研究動態』などの編集にあたる部署に勤める。蘇氏は李学勤氏の門下であり、修士課程は中国社会科学院研究生院歴史系に学び、博士課程は清華大学高等研究院に進んだ。2010 年『中原地区商西周青銅器夔紋研究』により歴史学の博士学位を取得している。本書は 2002 年の同名の修士論文に基づき、今回増補修訂の上刊行されたものである。

本書は秦・三晋の紀年兵器銘文を素材に、所謂「物勒工名」制度を研究したものであり、当時の手工業管理制度や文字考釈、歴史地理の側面を解明している。修士論文の段階ですでに高い水準にあった本書であるが、さらに新しい資料を加えるとともに、型式学も精緻なものとなっている。さらに『清華大学蔵戦国竹簡』繋年など関連の資料も用い、附録六篇を収録するなど、内容を充実させている。今後の益々の活躍が期待される。

（執筆：下田誠）

《学会彙報》

○例会委員会より

・2013 年度第 2 回例会（総 58 回）が、2013 年 12 月 7 日（土）、成城大学を会場に開催された。

○広報委員会より

本会のホームページ（http://www.shutsudo.jp/）は、グーグル等の検索エンジンから「中国出土資料学会」で検索してもすぐに見つかります。

○ＨＰ委員会より

中国出土資料学会専用ドメイン（http://www.shutsudo.jp/）取得に伴い、

①事務局用メールアドレスが変更になります。

office@shutsudo.jp

②会員を対象にご希望のメールアドレスを発行します。

メールアドレス発行ご希望の方は、

*****@shutsudo.jp となりますので、

*****部分を第 2 希望までご準備のうえ、

web@shutsudo.jp までご連絡ください。

○会報委員会より

・2012 年 7 月 21 日に開催された臨時総会において、「中國出土資料學會著作權規定」が承認され、即日施行されました。本会報については第 46 号（2011 年 3 月発行）から同規定が適用されます。対象となる各号掲載の著作物の利用に際しては、同規定の定めるところにより処理されることになりますので、希望される方は、ＨＰ掲載の利用申請書をダウンロードして事務局まで申請してください。

・年 1 回発行の雑誌『中國出土資料研究』が学問的成果を会員諸氏にとどまらず広く内外の研究者に提供することを目的としているのに対し、年 3 回、例会・大会開催時に合わせて発行される会報は新しい学術情報をできるだけ早く会員諸氏に提供することを目的として編集されています。しかし編集委員会単独ではなかなか十分な最新情報を入手することが容易ではありません。どうか会員各位におかれましては有益な情報を入手されたら、是非とも会報編集委員会に原稿の提供をお願い致します。原稿は、事務局宛電子メールの添付ファイルとしてお送りください。

今後会報の内容を一層充実させるため、会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○機関誌委員会より

（1）『中國出土資料研究』第 19 号の締切について

2010 年度大会（2011 年 7 月 16 日開催）および 2011 年度大会（2012 年 3 月 10 日開催）にて、『中國出土資料研究』の投稿要領改定が承認されております。第 19 号の投稿締切日は、2014 年 12 月末日です。

ふるってご寄稿下さいますよう、お願い申し上げます。

（2）『中國出土資料研究』原稿送付先について

原稿の送付先は、会報末尾記載の事務局住所宛にお願いいたします。

○事務局より

住所変更等が生じた場合は、書面にて下記宛にご連絡下さい。

〒 113-0033　東京都文京区本郷 7 － 3 － 1
東京大学文学部　大西研究室
中国出土資料学会（事務局）